

# こころ

## 森鷗外「舞姫」のヒロイン、エリスのパラノイア

高校3年生の現代文の教科書に森鷗外の「舞姫」が掲載されています。授業では、先週行われた中間テストの範囲となっていました。下に示したのは、400字程度のあらすじです。

19歳で大学を首席卒業した豊太郎は某省に出仕し、22歳の5年前ベルリン勤務を命じられた。3年が過ぎ25歳になったある日、教会の前で涙を流す少女エリスと出会い、心を奪われる。涙の訳を知り父の葬儀代を工面して以後交際に発展する。しかし、そのことなどを仲間が讒言し免職されてしまう。そんな中、友人相沢の助けで、新聞社のドイツ駐在通信員の職を得、エリスと暮らす中、学問は荒んだが、様々な見識をもつことができた。やがて、エリスは妊娠する。そんな折に、相沢の紹介で大臣のロシア訪問に随行し、信頼を得、豊太郎は日本へ帰国することを約束する。しかし、エリスには真実を告げられず、その心労からか数週間意識不明となる。その間に、相沢から豊太郎が帰国することを知らされたエリスは、衝撃の余り発狂してしまう。病が癒えた豊太郎は、エリスと生まれくる子のことをエリスの母親に託しつつ、大臣に従い帰国の途につく。

さて、エリスの発狂は、作中でパラノイアと診断されています。当時のパラノイアの概念は、現在のそれとはやや違っていて、幅広く精神錯乱状態全般を指していたようです。現在のパラノイアについては、ネット上の「日本大百科全書」では、次のように解説しています。

偏執病、妄想症ともいわれ、頑固な妄想のみをもち続けている状態で、その際に妄想の点を除いた考え方や行動は首尾一貫しているものである。幻覚、とくに幻聴は伴わず、中年以降に徐々に発症し、男性に多い。(妄想の内容 中略) 一般には、自我感情が高揚して持続的な強さや刺激性を示している。パラノイアを独立疾患とみる立場と、統合失調症の一類型とみる立場、あるいは一定の素質と生活史や状況から理解できるという立場などがあって、今日なお一定した見解はない。

ところで、エリスとの関係を断ちきり帰国した豊太郎について、授業での生徒たちは「女の敵」「最低男」「女心に疎い男」という感想を抱く一方、豊太郎の擁護も多かったので紹介します。

- ・ひどい人だと思ふ反面、どの選択をしても誰かを傷つけてしまう。決断をきっぱり下せなかったかわいそうなんであると同情する。これからの生活や活躍で決断の正しさを証明してほしい。
- ・将来のことと愛する人との別れの2択は難しいが、豊太郎の決断は勇敢だったと思う。
- ・エリスに言えなかったことは最低だとは思いますが、自分も豊太郎の立場だったら、そうなってしまったかと思えます。愛するが故に、大切に思うが故に、言えない切なさ。共感してしまいます。
- ・豊太郎は自分と似ている。決断できないで状況が悪化し、他人のせいにしてしまっている自分がいます。
- ・仕事と愛はどちらも大切。これは、両方を選べない、仕方がない一つの決断だったと思う。